

— 死生観とケアの現場 —

第2部公開シンポジウム  
「死の臨床と死生観」

資料集

東京大学 21 世紀 COE プログラム「死生学の構築」  
応用倫理教育プログラム

2004 年 6 月 26 日 東京大学



# 目次

開催趣旨 .....	
プログラム .....	
パネリスト紹介 .....	
第2部報告原稿 .....	
柳田 邦男（ノンフィクション作家）	
「物語を生きる人間」医学——「生と死」の人称性の視点から	
広井 良典（千葉大学）	
死生観そして「たましいの帰っていく場所」— 自然のスピリチュアリティをめぐって .....	
森岡 正博（大阪府立大学）	
死後の世界の存在を信じられない者の死生観 .....	
若林 一美（山梨英和大学）	
遺族の悲しみ .....	



## 開催趣旨

# 「死の臨床と死生観」

20世紀の最後の4半世紀にいたり、人類は新たに「死生の問題」に向き合うことを求めるようになった。今やほとんどの人が病院で死ぬようになったが、その病院は病人を治療し、生の場に送り返すためにあらゆる手段をつくすが、死にゆく人々のケアの施設としてはほとんど何のリソースももっていないことに気づかされた。やがて、ホスピスや緩和医療施設が発展するようになり、「死生のケア」の課題に取り組むようになってきたが、なおそれらの課題は、緒についたばかりという状況である。

ここでは、このような状況を、とりわけ「死生観」「生命観」「文明観」への問い直しという大きな射程において、現代において失われつつある物語性・神話性の意味や、死の悲しみという感情の意味をも問いながら、死の臨床の具体的な問題を考えてみたいと思う。

東京大学人文社会系研究科

21世紀 COE プログラム「死生学の構築」

拠点リーダー 島菌 進

応用倫理教育プログラム

主査 竹内 整一



# プログラム

## 第2部 公開シンポジウム「死の臨床と死生観」

日時：6月26日（土）14:00-17:30

会場：東京大学（本郷）医学部大講堂

司会：竹内整一（倫理学/東京大学）

14:00-14:15 開会の挨拶

14:15-17:15 報告と討議

パネリスト：柳田邦男（作家）

広井良典（科学哲学/千葉大学）

森岡正博（生命学/大阪府立大学）

若林一美（教育学/山梨英和大学）

17:15-17:30 閉会の挨拶

18:00-20:00 懇親会（学生会館本郷分館1F 食堂）





# パネリスト紹介

## パネリスト

柳田 邦男

ノンフィクション作家。著書に、『「死の医学」への序章』、『ガン回廊の朝』、『元気がでる患者学』、『「人生の答」の出し方』など。

広井 良典

千葉大学教授。社会保障論。著書に、『ケアを問いなおす』、『死生観を問いなおす』、『日本の社会保障』、『ケア学』など。

森岡 正博

大阪府立大学教授。生命学。著書に、『無痛文明論』、『宗教なき時代を生きるために』、『生命学に何ができるか』、『生命観を問いなおす』など。

若林 一美

山梨英和大学教授。社会教育学。著書に、『死別の悲しみを越えて』、『穏やかに死ぬということ』、『デス・スタディ』、『悲しみを越えて生きる』など。

## 司会

竹内 整一

東京大学教授。倫理学。著書に、『「おのずから」と「みずから」』、『自己超越の思想』、『日本人は「やさしい」のか』、『無根拠の時代』など。



## 第2部報告原稿



---

---

# 「物語を生きる人間」医学

— 「生と死」の人称性の視点から

柳田 邦男 (ノンフィクション作家)

---

---

## 1. 「死の人称性」への気づき

### (1) 脳死の息子との会話

- ベッドサイドでの 11 日間 (1993 年夏)

### (2) 脳死論の盲点への気づき

- 医学的・科学的脳死論と愛するわが子の脳死の身体の違い。
- その違いは何に起因するのか。

### (3) 「2人称の死」の気づき

- 客観的な死 (対象化された死) と人生・生活を共有した者の死の違い。

### (4) 背景にあった終末的医療とのかかわり

#### ① 現代医学が切り捨てたもの

- 「完全看護」という名の、家族の切り捨て。
- 患者を対象化する。
- 治癒不能となった患者の切り捨て。
- 「生」の方向でのみ評価する価値観。

#### ② ホスピス・ケア (ターミナル・ケア) のアンチ・テーゼ

- 死ぬまで生きるという視点
- 患者本人の納得のできる死
- 家族は最重要スタッフ
- 家族もケアの対象 (死後もフォロー)  
= 「2人称の死」の重視

## 2. 人称性による死の意味の違い

### (1) 哲学からの示唆

現代フランスの哲学者 V. ジャンケレヴィッチの「1人称の死」論

### (2) 「死の人称性」の臨床的・人生論的な意味

#### ① 1人称の死（私の死）

##### i) 最後までいかに有意義に生きるか。

「生きがい」「生きた証」「何かを全うする」「思い残しのない日々」…

##### ii) リビング・ウィル（生前の意思）

尊厳死、自然死願望、臓器提供

##### iii) 子どもと「1人称の死」

#### ② 2人称の死（あなたの死 —— 家族、恋人、戦友 …）

##### i) 「1人称の死」をサポートする。

ii) グリーフ・ワーク 子を喪った母親の困難

#### ③ 3人称の死（彼・彼女の死）

##### i) 親しい人の死

「2人称の死」に近い感情

##### ii) 職業的に強い関係性のある人の死

医療者と患者、福祉従事者と障害者、教師と教え子…「2.5 人称の視点」

##### iii) 尊敬する人の死

社会的な影響をもたらす死

##### iv) 戦争、災害、事故、犯罪等による死

衝撃による何らかの反応

##### v) 無縁の他人の死

## 3. 人間は物語を生きている

### (1) 「なぜ」に対する答えの有無、納得の有無

愛する人は「なぜ」死ななければならなかったのか？

#### ① 科学的・医学的な答え

#### ② 意味づけによる答え

● 「人間は物語らないとわからない」

● 「人が納得するための2つの道」

### (2) 人は人生という物語を生きている

#### ① 人の人生は一編の長編小説になっている

- ② 結果的に書かれた章と意識的に書かれた章
- ③ 人生の最終章をどう書くか
  - 「尊厳ある死」と「尊厳死」
  - 納得と受容
- (3) いのちの2面性
  - ① 生物学的いのち（生命）
  - ② 精神的いのち
- (4) 「意味のある偶然」の重要性
  - 物語には奇跡的なことがしばしば起こる
  - それは、物語の進展（人の心の成長、成熟）の重要な契機となる
- (5) 物語という「あいまいさ」の許容
  - 日本的「あいまい文化」の再生

#### 4. 科学の普遍性と物語の普遍性

- (1) 対象化と普遍性
  - 事故と対象の切断。追試確認が可能
  - 個別性の排除
    - 細分化されたものを集めても、人間像は見えてこない
- (2) 内面化と普遍性
  - 対象を自己の内面化する
  - 個別性にこそ目を向ける
  - 「物語の普遍性」
  - 「瞬間の真実」の存在
    - 追試不能でも、そこに真実がある

#### 5. 「生きられた時間」の創造

- (1) 死を前にした人の時間
  - 物理的に流れる「3人称的な時間」vs 生きている実感の濃淡によって意識される「1人称的な時間」
  - 「1人称的な時間」と「生きられた時間」（ウジェーヌ・ミンコフスキー）

- (2) 「問われた者(存在)」「期待された者」としての生きる意志。(V. フランクル)
- 「人生の問いのコペルニクス的転回」
  - 「内面化」による生きる力(マロニエの枝と乙女)
  - 「精神化」(神谷美恵子)による創作活動

## 6. 「人生の完成」のために

- (1) ターミナルケアの3条件
- ① 身体的ケア
  - ② 心のケア
  - ③ 「人生の完成」の支援
- (2) 新しいライフ・サイクル論の提唱
- ① 精神的いのちの重視
  - ② 遺された者の人生を決める「愛する人の死」
    - 心に生きる「死後生」
    - 遺された人の心を壊す医療、再生の医療

## 7. 専門化社会に「2.5人称の視点」を

- (1) 乾いた「3人称の視点」の落とし穴
- (2) 潤いと温もりのある「2.5人称の視点」へ



---

---

# 死生観そして 「たましいの帰っていく場所」

— 自然のスピリチュアリティをめぐって

広井 良典（千葉大学）

---

---

死生観というテーマは、一方できわめて“個人的な”性格のものであり、その人の生き方の全体に関わるものであると同時に、そこで問われている内容や問いそのものは、“普遍的”な性格をもっている。以下、このテーマについて、ささやかながら私自身がこれまで考えてきたことをまとめてみたい。

## 死生観の空洞化

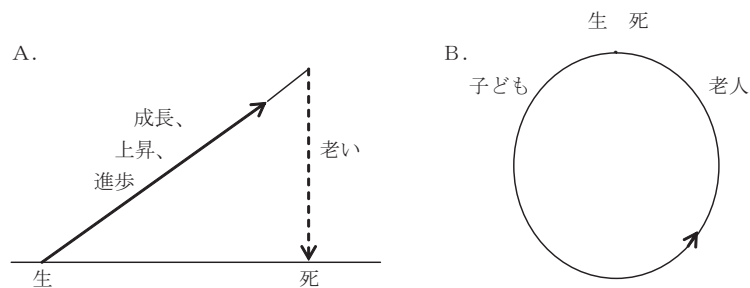
話のイントロダクションとして、時代状況という点にそくしてまず記すと、現在の日本社会は「死生観の空洞化」という状況にあるとずっと感じてきた。「死生観の空洞化」とは、一言で言えば“死ということの意味がよく見えないと同時に、生それ自体の意味もよく見えない”という状況であり、主観的な印象では、私くらいの世代（1960年前後生まれ）から次第に顕在化し、現在の若い世代においてはより顕著になっている状況ではないかと思っている。

その背景には、おそらく戦後の高度成長期ということが明らかに関係していると思われる。それは、「経済成長ないし物質的な富の拡大ということが社会全体のほとんど絶対的な目標となったこと」及び「（戦前の苦い経験もあり、）“伝統的なもの”が全て否定的にとらえられ脇に追いやられていったこと」等を内実とするものである。「着陸」ではなく「離陸」という方向のみが志向された時代ともいえるし、ある意味で戦後の日本社会ほどすべてが“世俗化”された社会は珍しいといえるのではないだろうか。

## たましいの帰っていく場所 —— ライフサイクルの二つのイメージ

ここで個人の死生観の内容それ自体にそくした議論に入ると、死生観ということを考えるにあたって、「ライフサイクル(人生)のイメージ」ということが手がかりとして重要と思われる。これについて、まずごく単純に記すと、大きく二つのライフサイクルのイメージが考えられる。一つは「A. 直線的なライフサイクルイメージ」であり、もう一つは「B. 円環的なライフサイクル・イメージ」である(図参照)。

図 ライフサイクルのイメージ



前者(A)のほうは、基本的に人生を“上昇、成長、進歩”といった層のもとにおいてとらえる見方で、それ自体は当然否定されるべきものではないが、しかし「老い」や「死」についてはどうしてもネガティブな位置づけとならざるをえない(キリスト教の時間や人生のイメージはある意味ではこれに近いが、重要なこととして、キリスト教の場合には、そうした「死」の先に復活ないし救済、そして“永遠の生命”という、時間を超えた世界が想定されている)。

こうした見方に対し、後者(B. 円環としてのライフサイクルイメージ)のほうの見方では、人生とは、生まれた後、青年期、壮年期、老いの時期という具合に大きく円を描きつつ、もとの(生まれた)場所に帰っていくプロセスとして理解される。前者の見方に対し、「生と死」が同じ場所に位置していることに大きな特徴がある(考えてみれば、私自身の意識にそくした場合、「生まれる前の世界」も「死んで後の世界」も、私自身の意識が存在しないという意味では同じである)。

このように考えていくと、死というものを私が何らかのかたちで理解し受け入れるということは、私にとっての「たましいの帰っていく場所」とでも呼ぶべきものを自分なりの仕方で見出していくことではないか。こ

の(未知への移行ではなく)「帰っていく」という感覚は、死生観あるいは死の理解にとって非常に重要な意味をもつものと私は感じている。(若干余談であるが、こうしたことを思うようになった一つのきっかけを与えてくれた映画として、死の近いことを意識し始めた老女が、自分の生まれた場所をもう一度見届けたいと思って旅に出る過程を描いた『パウンティフルへの旅』(1985年)という作品がある)。

## 「自然のスピリチュアリティ」——日本人の死生観の3つの層

ではそのように帰っていく場所としての「死」とはいったい何か。「たましいの帰っていく場所」とは何か。

ここで議論を若干迂回させるようだが、「日本人の死生観の3つの層」ということについて考えてみたい(日本人とひとまず記すが、究極的には以下に述べることは日本人に限らない、より普遍的な意味をもっている)。

私は、日本人にとっての死生観は、ごく大まかにとらえ返すと、次のような3つの層が主なものとして指摘できるのではないかと考えている。

第一の層は、もっとも基底にある次元で、「“原・神道的”(ないし汎神論的)な層」とも呼びうるものである。これは「自然」の様々な事物・事象の中に、たんなる物理的な存在を超えた、あるいは生と死を超えた何かを見出すような感覚ないし死生観をさしている。山や木や風や川等々に“八百万(やおよろず)の神様”を感じ取る感覚でもあり、そこには同時に「死」が含まれている(あるいは、古事記等に出てくる「常世(とこよ)」「根の国」といった他界観であり、そこでは「死」がこの世界のどこかに存在する場所として具体的にイメージされている)。こうした死生観ないし世界観をここでは「自然のスピリチュアリティ」という言葉で表現してみたい。

第二の層は、「仏教的(あるいはキリスト教的)な層」であり、これは仏教伝来とともに伝わり、第一の層の上に築かれるような形で浸透していったものである。キリスト教もそうであるが、これら言語化され体系化された高次宗教の死生観においては、「死」は“永遠(の生命)”、“涅槃”といった概念とともに、抽象化・理念化された形でイメージされる。第三の層は、戦後とくに高度成長期に支配的になった死生観で、端的にいえば「死は無である」という死生観である。“唯物論的”という表現も使えるかもしれないが、個人の意識や存在を物理化学的な事象として理解し、そうした見方を“科学的”にとらえるような考え方の枠組みである。この第三の層が、戦後あるいは高度成長期以降の日本人にとって圧倒的な「力」を

もったことはあらためて言うまでもない。

表 日本人の死生観の3つの層

	特質	死についての理解/ イメージ	生と死の関係
A. “原・神道的”（汎神論的）な層	「自然のスピリチュアリティ」	「常世」、「根の国」等 cf. 「桜ロード」 … 具象性	生と死の連続性・一体性
B. 仏教（・キリスト教）的な層	現世否定と解脱・救済への志向	浄土、極楽、涅槃等（仏教の場合）、永遠の生命（キリスト教の場合） … 抽象化・理念化	生と死の二極化
C. “唯物論的”な層	“科学的”ないし“近代的”な理解	死 = 「無」という理解	生 = 有 死 = 無

### 「死の抽象化・無化」と「神（神々）の抽象化・無化」

以上、死生観の3つの層ということをも簡潔に述べたが、この3つは互いにどういう関係あるいは「構造」にあるのだろうか。私は、これは「死」及び（生と死を超えた存在としての）「神（神々）」というものが、人々から遠ざかっていったプロセスではなかったかと思う。つまり、第一の層においては、「死」や「神々」は自然の中の具体的な事象とともに存在するものとして身近に感覚されていた。生と死は連続していて、一体のものだったともいえる。第二の層においては、そうした「死」や「神」は抽象化・理念化された概念となり、いわば人間にとって“無限遠点”に遠ざけられ、「生と死」は明確に区分されたものとして二極化される。最後に第三の層においては、そのようにして理念化・抽象化された「死」及び「神（神々）」が、端的に“存在しない”ものとされる。

こうした意味で、「死の抽象化・無化」と「神（神々）の抽象化・無化」は、パラレルな出来事といえるのではないだろうか。そして、私たち現代人あるいは現代の日本人にとって大事なものは、特に戦後の時代に次々と脇にやり忘れていった第一・第二の層を、もう一度確かめ、そことのつながりを回復し、何らかの着地点を見出していくことではないか。このことが、先ほど述べた「たましいの帰っていく場所」ということとも重なっていくのではないかと思われる。

なお、筆者らが現在進めている研究会(「新しいケアモデルに関する研究会」)において、ケアないしコミュニティと「自然」そして「スピリチュアリティ」をつなぐような様々な実践例について調査研究を行っていることを付言させていただきたい(たとえば神社やお寺を舞台とした保育、環境学習、高齢者ケアなど)。

## 【付論】死は「無」なのか

以上死生観をめぐるいくつかの視点について述べたが、それでも「死が『無』であることについては変わらないのではないか」という問いが発せられるかと思われる。これについての私自身の現在の考えを記しておきたい(やや理屈っぽい議論になることをお許しいただきたい)。

私のこの点についての考えは、一言で言えば「死とは、有でも無でもない何ものである」というものである。

通常私たちは、「生とは有であり、死とは無である」というふうに考えている。しかしはたしてそうだろうか。

まず生についてであるが、考えてみると、私たちの生きるこの世界は、次のような意味で“「相対的な有」と「相対的な無」の入り混じった世界”ではないか、という理解が可能と思われる。

つまり、たとえば私がいま目の前のテーブルの上にあるコーヒーカップを見ているとしよう。コーヒーカップは私の前に確かに存在している。けれども、そのようにコーヒーカップを私が認識しているというとき、私は実際には私のほうには見えないカップの「裏側」もまた、(見えないけれども)確かにそこに存在していると了解している。いやそれどころか、そうしたコーヒーカップの、現在は見えない背面が当然に存在しているということがあって初めて、それは「コーヒーカップ」という物として認識されるのである。このように考えていくと、私たちが生き認識しているこの世界は、有に満ちているのではなくて、むしろそこにはいわば無数の「無」が介在しており、しかもそうした無数の「無」によってこそ、世界はある安定した秩序を保って存在している、と考えることができるのではないだろうか。

しかも、その場合の「有」は、次のような意味で「相対的」なものである。たとえばコーヒーカップが視覚像として「白く」見えるのは、背後にあるテーブルの薄茶色との対比においてはじめて、自らのその色を主張できるのであり、これは色彩に限らず最終的にはすべての属性について言えることである。つまり他との関係や対照をまって初めて浮かび上がるという意味で、「有」そのものもまた「相対的」である。

したがって以上を踏まえると、先ほどふれたように、私たちの生きてい

る世界は“「相対的な有」と「相対的な無」の入り混じった世界”であるということが言えると思われる。

ここまで考えてくると、次のような、ある意味で常識破壊的な見方が可能となる。それは、「もし『絶対的な有』というものが存在するとしたら、それは究極において『絶対的な無』と一致するものであり、それがすなわち死ということに他ならない」という考えである。

いま述べたように、他との関係や無数の「無」の存在によって成り立っているのが私たちの生きるこの世界である。だとすれば、もしも「絶対的な有」——「純粋な有」といってもよいかもしれない——というものがあるとすれば、それは他とのいかなる関係性ももたず、自己完結的に「すべて」であるような何ものかである。ならばそれは「絶対的な無」あるいは「純粋な無」と一致するのではないだろうか。そして、そのような「絶対的な有 = 絶対的な無」こそが、他でもなく「死」ということである（また「永遠」あるいは「永遠の生命」と呼ばれるもの）と考えられるのではないだろうか。

先ほど、ここでの私の結論が「死とは、有でもなく、また無でもない何ものかである」と述べたのはこうした意味をさしてのことである。

つまり整理すると、私たちは通常

生 = 有

死 = 無

というふうに考えている。しかしそうではなく、

生 = “「相対的な有」と「相対的な無」の入り混じった世界”

( = 時間のある世界 )

死 = 絶対的な無 = 絶対的な有 ( = 永遠 )

というのがここでの結論である。

したがって、死は私たちが通常考えるような意味での「無」ではない。あえていえば、それは私たちがふつう言うところの「有」と「無」のいずれをも超えた、ひと回り大きな「何か」ではないだろうか。そしてそれは時間そのものを超え出ているという意味で「永遠」と呼べるものである。

キリスト教や仏教が「永遠の生命」といった言葉あるいは概念で表現してきたものは、あえてそれを硬質な言葉で表そうとするならば、そのような何かなのではないだろうか。

---

---

# 死後の世界の存在を 信じられない者の死生観

森岡 正博（大阪府立大学）

---

---

今回のシンポジウムで、私が何を問題提起すればいいのか分からないのだが、議論してみる価値のあるテーマのひとつは、死後の世界の存在を信じられない者の死生観についてかもしれない。私は、近著『無痛文明論』の第7章でも詳しく書いたように、自分が死んだあとに行くような世界の存在を信じていない。もちろん論理的には、死後の世界の存在については肯定も否定もできないことはよく分かっている。だが、自分の気持ちに正直になったとき、自分が死んだあとにいく世界があるとは信じられないのである。このような気持ちをもつ人間は、それほど多くないのかもしれないが、しかし無視できるほど少数でもないだろう。このような気持ちをもつ人間は、おそらく、宗教が社会のなかで大きな力をふるっていると思われれる諸国にも、きっと存在しているのではないだろうか。

私の周囲には、宗教を信仰している人や、宗教を教え実践している人がたくさんいる。私は彼らと接触するたびに、私と彼らのあいだにある無限の壁の存在をひしひしと感じてしまう。彼らに言わせれば、自分たちもまたみずからの信仰に日々ぐらつきを感じているのであり、普通人と同じような疑問や揺れにいつも襲われているということらしい。だが、それでもなお彼らは、死後の世界や永遠の命を保障する信仰システムに賭けようとしているのであり、あるいはそれらが存在するという世界観がもっとも自分たちにしっくりきているのである。これに対して、私は、死後の世界があるという考え方が、どうしてもしっくりとはこない。死後というものは「無」以外ではあり得ないのではないかというのが、私にいちばんぴたりくる「感覚」なのだ。

私をも含めた、そのような「感覚」をもつ人々が、死にゆくときに、いったいどのようにしてこの世との離別を果たせばいいのだろうか。そしてこ

のような人々の死を看取るとき、看取る者はいったい何をもって接していけばいいのだろうか。これは、理屈だけの問題ではなくて、病院の中で死にゆく人々をケアする専門家たちが、日々悩んでいる問題でもある。スピリチュアルなケアをほどこす専門家としては、キリスト教や仏教などの宗教の専門家が想定されるが、このような人々がそれらの宗教者に看取られるとき、自分は死後の世界は「無」だと感じているのに、このケアする人は死後の世界や永遠の生命を信じている、という強烈な疎外感を感じることがあるかもしれない。それはスピリチュアルなケアにおいて、きわどい断絶を作り出すかもしれない。

死後の世界を信じないで死んでいく場合、とくに人生の中期から晩年において、「死の恐怖」「生のはかなさ感」「生の無意味感」などにさいなまれることが多くなるかもしれない。死後の世界を信じない場合、自分自身の限られた生は徐々に残り少なくなっていくわけであり、過ぎ去った生はもはや取り戻すことはできず、残されるのは徐々に食い尽くされていく小さな炎だけである。背後から無の絶壁に落ちていくような残忍な時間の経過を前にして、私はいかにして自分の人生を肯定することができるのだろうか。

ひとつの可能性は、死後の世界に賭けるのではなく、私が死んでもなお続いていくであろうこの世界との和解を果たすことなのかもしれない。もちろん、私が死んだあと、この世界が私なしで続いていくということを保障するものは、論理的には何一つない。また、この文章が厳密に何を意味しているのかを確定することすら、哲学的な大問題である。しかしながら、私の死後もこの世界が続いていくということに、何かしっくりくるリアリティを感じるができるのだとすれば、私にはそれとのあいだの、和解あるいは決着を残された時間で付けていくことが大事なかもしれない。それはおそらく、私のいままで形成してきた人間関係にひとつひとつ決着をつけていくことであろうし、同時に、私を取り巻くこの環境世界、宇宙とのあいだに、身体全体で納得する和解を取り付けることであるのかもしれない。この点については、竹内整一がかねてより日本人の生命観・自然観として論じている諸点とかぶさってくるのではないかと思われる。私はそれが特に日本独特だとはまったく思わないのであるが、過去に同じようなことで悩んだ人々がいるというのは、なにかの慰めとなるような感じもする。

哲学的に言えば、結局、「時間」ということ、そして「かけがえのなさ」ということを、再度突き詰めて考えることであると思う。中期以降のハイデガーのように存在の奥義へと逃げるのではなく、かぎられたいまこの生の残酷さについて、考え抜いていくことが必要なのではないかと私は思う。



非常に短い要旨となってしまったが当日は、さらに考えてみたい。



---

---

# 遺族の悲しみ

若林 一美（山梨英和大学）

---

---

「死は始まりの時」というのが、これまで30年近く、死にゆく人や愛する人との死別を経た人たちの話を伺ってきた私の実感である。

死と対峙した時、多くの人たちはふだん意識することのなかった問いの前に立たされる。「わたしはどこから来て、どこに向かおうとしているのか」——死を間近にした人は、残された時間の長短ではなく、有限の存在であることの意味に目をむけ、遺族もまた悲しみゆえに、生き続けることそのものが困難な状況のなかで、生かされていることそのものを問おうとする。

否応なく生と死の境界に身を置くことによって、向き合わざるを得ない痛みや悲しみは個々人で答えをだすことなのかもしれないが、私たちの暮らす社会のなかでは、そういった悲しみを抱いていることを周囲に秘し、あたかも何ごともなかったかの様な顔をして日常生活をおくることが強要されている。そしてそのような社会に暮らしている現実に、当事者になってはじめて直面し、気づかされる。愛する人の死による喪失感は社会的孤立によって深まってゆく。

悲しい時に涙を流すことは自然なことで、異常なことで、ましてや病的なことでもない。むしろ泣きたい時に泣けない社会のなかで人は身も心も病んでゆく。

子どもを亡くした親の会「ちいさな風の会」の歩みと活動について

「ちいさな風の会」は、1988年1月から半年間、私が新聞誌上に連載した死の周辺に関する記事がきっかけになって生まれたセルフヘルプグループである。

わが子を亡くした読者たちから寄せられた「同じ体験を経た人に会いたい」、「他の人たちはどのようにして生きているのか知りたい」というじつに率直で切実な声が、会の発足に

つながっていった。同年初夏に準備会がひらかれ、13名の父母が集まった。お互い同士顔をみただけで、涙がこみあげ、名前すら名乗ることができず、2時間あまりの間、ほとんど話らしい話かとびかったということではなかった。うつむいたまま、時にこみ上げるような嗚咽がもれ、静かな時が流れていった。

参加者にとって苦しい時間であった。表面的には止まっているかのような静寂は、言葉にならない悲しみの集積であり、様々な思いが交錯する時間であった。そしてこの苛酷とも思える空間にとどまった人たちの発案で「ちいさな風の会」がうまれたのである。

一般の状況のなかでは、このようなつらさや悲しさがむき出しになりそうになると、話題が切り替えられ、場を盛り上げることを目的とする話題が提供されるようなことがよくある。気まずさを回避するために、当事者の思いが無視されてしまうのだが、そのようなこともなかった。

「同じ体験を経た人がどのように生きているのか知りたい」「一筋の光をみいだしたい」と、「わが子の死」ということだけを核にして会が生まれたのである。

慰めの言葉や、話の内容に同意をしめず相槌が飛びあったわけでもなかった。意識をして自らを語り、他者の言葉に耳を傾けていく余裕など誰にもなかったが、涙が出そうになる心情をさえぎられたり、非難されたりすることなく、安心して自分をさらけ出すことができた。お互い同士、言葉としてかわされたものだけではなく、その姿、もらされるため息のような、かすかな吐息にもわが身を重ねて言ったのだと思う。

当初13名で始まった会も16年目に入り、北海道から沖縄まで200名強の会員がいる。集会在を重ねられてゆくなかで、子の死にともなう悲しみが時間の経過によって単純に忘れられてゆくものではないこと、周囲の思い込みの前で言い返すこともできずにいたこと等が、共有体験者の会のなかではむしろあたりまえのことで、自分の感覚が正常であることを実感とともに確認していったのである。

会員の年齢、死別からの歳月、死亡した理由、子の年齢なども様々で、死別直後の初七日が終えたばかりで集會に出席する人も三十三回忌を終えて入会してくる人もいる。現在でも女性(母親)がほとんどだが、近年父の立場で入会、集會や文集への投稿など会の活動に参加する男性の比率が増えている。夫婦で同じ集會に参加する人も多くなっている。

会の活動は東京での隔月の集會と年2回の文集(手記集)、年8回のニューズレターを発行している。地方での集會が一年に5、6回となる。

1997年からはテーマ、対象者別に設定した分科会が定期的に行われるようになった。現在では年間500人ほどの遺族がこの会を通じての出会いを重ねているが、会員数も増え、時によると集會に50人ほどの人が集まることもあるので、小規模な集會を持つ必要性がでてきたことがある。

最近とみに参加者が増えているのが、「suicide-自死で子を亡くした親」を対象とする分科会だ。2002年からは一泊での三回の会も含め、18回の集會が持たれている。時によると日本各地から20人を越える父母の集まる分科会となるが、6年ほど前から、自死による別れを体験した親たちからの問い合わせや入会希望が急増している。

分科会にはこの他、「残された子との関わり」(残された家族同士、とくに子どもとの関係を中心にした会)、「sibling-兄弟姉妹の会」(兄弟姉妹の死を体験した子どもたちの会)、「家族・夫婦について」「only child-ひとり子」「empty arms-幼子、死産、流産など」「加害者責任と被害者の癒しについて」「terminal care-看取りと医療について」といったテーマでの話し合い、ビデオをみでの話し合いの会、読書会などを持っている。

集會は通常3~4時間位、参加者の人数によっては、全体会と小グループによる話し合いを織り交ぜながら進められる。特別なテーマを設定することもなく、自己紹介、近況報告、悩みや相談など、そのときの気持ちが自由に話されてゆく。話したければ話したいことを語りつくし、話したくなければただ黙って座っていてもかまわない。

またこの会では発會と同時に、自分の思いや心情を自由に綴り、発表する場として文集(「あー風」)を発行してきた。まもなく31号目が発行されるが、文字による表現の場を保ってきたことも、この会にとっては大きなことであった。

集會の場と同様、自らの思いを心置きなく語れる文集によって会員たちは思いを相互に伝え合うことができたのだと思う。

わが子の死と、死別による悲しみを共通項にして集った人たちが、歳月を経てゆくなかで、あらたな試練と出会うこともある。自らの老いや病、配偶者やその他の家族の死、病気、そして社会の変化に伴う出来事など。「ひとつの死」の悲しみは、時間の流れのなかで変化し、その痛みがやわらいでゆくこともあるのかもしれないが、人は無菌の試験管のような中で暮らしているわけではなく、本人の意志や決意ではやりすごすことのできない現実には次々と直面してゆく。悲しみはたんなる通過点のようなものではなく、想像もしないような出来事の前で、つねに自らが試されてゆく。

決心、決意、総括といったけじめをつけ、固定した状態に自分を保つことができれば安心なのかもしれないが、現実の人の生はつねに流動的で不

安定なものである。そのような揺れ動く自分、変化し続ける自分を認めてくれる場が現在の社会のなかにはすくない。

共有体験者の会のなかでは「同じこと」「同じ思い」をよりどころに人の輪が生まれてゆく。その安心感のなかで泣きたい時に涙を流し、うれしい時に笑える自分をみずからが許せると感じた時、べつな表現をするならば、「あるがままの自分」を認められたとき、死別や離別の事実は動かせなくても、その受け止め方が変化していくことがある。そしてそのことが生きるきっかけとなることもあるように思う。その安心感を得た時、人は、はじめて自分を語りはじめる。かつてはこのような知恵が、地域の先達からうけつがれていたのだろう。しかし今そういった「その人に備わった時を待ってくれるような場」が消滅してしまった。

悲しみを接点にして集まった人の輪のなかに入っても悲しみを癒す特効薬はない。むしろある遺族が語った「ここに来ると誰も元気になれといわない。だからすこし元気になれたのかも知れない」の言葉のように、その人の思い、時が個別のものとして尊重される実感が貴重なのだと思う。

苦しみ、悲しんだこと、悲しみの根源そのものが、その人に生きる力を与え、専門知識や情報ではなく、傷ついた人同士が互いに癒しあっていく。

悲しみはたんなる通過点のようなものではなく、想像もしないような出来事の前で、つねに自らが試されてゆく。人が生きる上での知恵を聞き取れることは、伝えることにもつながってゆく。知恵そのものだけでなく、そこに耳を傾ける姿から、新たな物語がたちのぼり、気づかなかった自分と出会うことにもなる。